



実施報告書

正岡子規没後二二〇年

法隆寺芸術祭

鐘が鳴るなり

入場無料

2022.9.17(土)-19(月・祝)
9:00~17:00(最終日14:00閉館)
法隆寺聖徳会館

主催 法隆寺芸術祭実行委員会
共催 法隆寺
企画運営 (株)国民みらい出版
後援 奈良県、奈良県教育委員会、毎日新聞奈良支局、奈良テレビ放送

未来と
照
み
す
美
の
光



1 ご挨拶

法隆寺芸術祭を終えて

正岡子規没後 120 年の節目の子規忌に、奈良斑鳩の古刹・法隆寺で、アートと文学の展示イベントを開催し、多くの来場者をお迎えし、心配した台風も進路がそれて無事終えることができ、一同安堵しております。元はといえば、子規の「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の句が結んだ縁ですが、直接には、斑鳩町文化振興財団の理事会で知遇を得た大野正法執事長とのご縁で実現しました。

展示会場となった聖徳会館は高い天井の荘厳な建物で、当初少し立派すぎるのではと懸念を抱きましたが、力強い作品ともよくマッチしたのではないかと思います。普段入ることができないので、舞台奥に安置された聖徳太子像も特別開帳していただいたことはありがたいことでした。

今回、何よりも多くの作者の方々とは直接お会いでき、制作意図や制作方法などをお聞きできたことは評論する者として多くの貴重な示唆をいただきました。またアーティストの中には、神秘的な、ある種の啓示を受けて、そのインスピレーションを作品に表現したという方が何人かいらっしゃって、その話が強く印象に残りました。

子規は若くして肺結核を患い、後に脊椎カリエスとなり、激痛の苦悶の中で仕事をし、耐えかねてモルヒネで痛みをやわらげて絵を描き出しましたが、彼は次のように述べています。「草花を描く時、どの色を使おうかと考えるのが楽しみだ。創造主もこのように花の色づけを楽しんでいるのだろうか。時々、神が私の手を借りて描いているような気さえすることがある」

こんなことを考えさせられるのも、飛鳥時代の姿を今に伝える世界最古の木造建築である法隆寺という霊験あらたかな霊場ならではかもしれません。ともかくも滞りなく展覧会を終えられたこと、法隆寺様はじめ、皆様方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

2022 年 10 月

正岡子規研究所長 正岡 明



法隆寺第7代管長・古谷正覚氏と

2 開催概要

法隆寺芸術祭～未来を照らす美の光

会 期	2022年9月17日(土)～19日(月)
開催時間	9:00～17:00(最終日は15時閉館)
会 場	法隆寺聖徳会館
展 示	絵画・書道・写真・工芸・俳句・短歌・川柳・現代詩ほか
入 場 料	無料
主 催	法隆寺芸術祭実行委員会
企画運営	株式会社国民みらい出版
後 援	奈良県、奈良県教育委員会、毎日新聞奈良支局、
協 力	奈良テレビ放送
広報活動	マスコミ各社にプレスリリースを配布



聖徳会館

3 展示構成

絵画および平面作品

油彩画、水彩画、水墨画、絵手紙、パステル画、チョーク画、写真、書道

立体および工芸作品

パッチワークキルト、フラワーアレンジメント、羊毛フェルト、レザークラフト、プリザーブドフラワー、3Dジオラマ工芸、レースなどのコラージュ、押し花、折り紙、染織、染色、苔テラリウム、刺繍、ステンドグラス、人形(クレイ、和紙、木)、手編み、手作り香、和紙折染

文学・文字作品

俳句、短歌、川柳、詩、自費出版書籍

児童作品

法隆寺幼稚園、斑鳩町内の絵画教室、ヒッポファミリークラブ関西本部



4 開催レポート

2022年は正岡子規の没後120年に当たり、各地で関連イベントが実施されています。その多くが俳句に関連する催しで、絵画や書道を含めた展覧会は松山市の子規記念博物館で2021年に開催された子供の展覧会だけです。

本展、『法隆寺芸術祭～未来を照らす美の光』は、薬師寺、春日大社、東大寺で行った「まほろばのあかり」の流れを組むイベントです。今回は、従来の芸術灯籠による「あかり」を本来の展示物である実物作品に替え、その美しい芸術作品が放つ「ひかり」を感じて頂くことになりました。

展示作品は、子規の芸術性を象徴する「多様性」に重きを置き、偏りをなくした芸術作品を選出致しました。その結果、水彩油彩に限らず幅広い技法の絵画、文字芸術、文学、伝統的なクラフト、工芸から苔テラリウムなどのインテリアアートに至るまで、幅広い分野に渡りました。

近隣から全国規模の団体まで、日頃から芸術に携わる子供たちの作品も加え、子供から大人まで世代を超えた260点の作品が集う、まさに芸術の祭典となりました。

さらに、正岡子規の短歌や俳句、絵葉書、勲章、愛用した一輪挿しなど、遺品の展示も行うことで、没後120周年に相応しい記念イベントにもなりました。

会場となった法隆寺聖徳会館は、主に法隆寺ゆかりの公式行事を執り行う施設で、過去に県外の団体に貸し出されたことは皆無。その点でも開催前から注目を集めました。

一般来場者は3日間で約1500名。大型の台風14号が接近する中、多くの参拝客が法隆寺を訪れました。拝観の流れから自動的に本展会場にも立ち寄り、僥倖とセレンディピティーに目を輝かせる姿が目立ちました。

展示についての印象(来場者アンケートより抜粋)

- 「別世界のような世界でした」
- 「楽しさがキューキューに詰まっていた」
- 「構成が面白い」
- 「静かな雰囲気にほっこりした」
- 「とても素敵な時間を過ごさせてもらいました」

作品についての印象(来場者アンケートより抜粋)

- 「きれいで、自分の家に飾りたいと思った」
- 「世界観に引き込まれた」
- 「技法に興味があった」
- 「生き様を思い起こさせてくれた」
- 「細かい細工に驚いた。細部まで美しかった」
- 「丁寧につくられている」
- 「心に残りました」
- 「ぐっと迫るものがあった」
- 「心が洗われた」
- 「優しい気持ちになれた」

所感

弊社は子規の末裔である正岡明氏と深いご縁があるため、この節目を特に重要な機会と捉えました。会期最終日が9月19日となったのは、子規の命日を偲ぶ思いがあったからにほかなりません。

会期中は出展者、一般来場者からコロナの影響を感じることはなく、コロナ禍以前の日常が復活したことを確信しました。台風の影響で来場を見合わせた出展者もいらしたので、秋の3連休ということもあり、台風の影響がなければ5～10倍の来場があったと推量されます。強風に煽られながらも会期中降雨に見舞われなかったのは幸いでした。

法隆寺のような人気の観光名所は一般来場者に恵まれるため、会場側の許可が降りれば今後も開催を継続していきたいと考えております。

とはいえ、観光客はたまたま展覧会を目にしたのであって「芸術品を鑑賞しに来ているのではない」という大前提があります。作者である芸術家としては、芸術鑑賞目的の来場者に見て頂きたいという意向があるのは承知しております。このような観光・参拝施設では、多くの方に作品を知って頂く、興味や関心を持つきっかけになることを期待して頂ければというのが弊社の思いです。

前頁に来場者の感想を記載しましたが、実行委員会スタッフの印象としまして、
「通常の展覧会と違って僅かながら仏教色の強い作品もあり、宗教施設ならではの威光を放っていた、
「絵画を筆頭に植物をモチーフとした作品が例年以上に多くなり、各々、作者が異なるにも関わらず奇跡的な統一感が生まれていた、
「どの作品も会場の雰囲気と調和をもたらし、ユングが語るころの「集合的無意識」を作り出しているかのようであった、
「かつてロンドンで開催したスカーフ展同様、タペストリーのような風合いの作品は歴史的建造物と相性がよく、今後の展示物にも活かしたい、
といった点が今回に限って抱いた感想です。

展覧会のタイトルは、暗澹たる国内外の社会情勢の中、芸術作品が放つ美の光が輝かしい未来を照らすことを願って名付けました。マスク越しではありましたが、出展者の皆様を始め、作品をご覧になった来場者の顔は一様に輝いており、思いだけは伝わったのかも知れません。

法隆寺芸術祭実行委員会

国民みらい出版

